

活動報告書

報告者氏名：大賀恵美子

所属：大分県立別府支援学校石垣原校

記録日：2013年 2月 13日

【対象児（群）の情報】

・学年

中学部 1年 男子 1名

・障害名

デュシャンヌ型筋ジストロフィーによる体幹機能障がい、他

・障害と困難の内容

障害の進行に伴っての活動制限（体位は、仰臥位と右側臥位での活動）

身体機能の制限（可動域：手首と親指のみ）

病気の進行が速い

【活動目的】

・当初のねらい

小4から病棟へ入院し、家族と生活の場を離れて過ごしている。中学部入学当初は電動車イスを自ら操作して過ごしていたが、進行に伴って4月下旬よりベッドサイド授業となった。学習に対してはどの教科も意欲的であるが、病棟から出られない生活と胃ろうの手術をしたため、夏休み等も帰省ができなくなった。友だちとも会うことができなくなり、家族の面会も少なく自分を否定する発言や生徒の様子から気持ちが落ち込んでいるように観察されたので、「友だちや家族と病院内でも繋がることできる」ことを目的とした。また、病気の進行の経過によって活動制限が増えてきていたこともあり、生徒の発言から自分の否定へ繋がっているように見受けられたので、「自分で操作できる」ことの2つを目的として取り組んだ。

【タブレット端末を使って、外部と繋がることできる。】

【自分で操作をすることが出来る。】

・実施期間

2012年6月～2013年2月

・実施者

中学部 大賀恵美子（臨時講師）

・実施者と対象児の関係

担任

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児（群）の事前の状況

どの教科でもとても意欲的に取り組んでいたが、急にベッドサイド授業になってから学校に登校できなくなり、「友だちと話せない」「学校に登校したい」や胃ろうの手術をする前は「僕はいなくなればいいんだ」「僕を思いっきり殴って」など自分を否定する言葉を発して落ち込んでいる日々が続いていた。

・活動の具体的内容

「Skype」のアプリを利用した。（総合的な学習の時間、特別活動、学校行事等）

（iPadは対象生徒が操作することができなかったが、iPhoneやパソコンなら操作が可能なので使用した）

「Skype」は同じ時間を共有することができ、話し合いや友だちと画面上で顔を合わせることができ、表情を観ながら話すことができた。お互いに手を振ったりふざけたりして会話もすることができた。生徒が慣れるまでは教員が操作をしていたが、右側臥位の時には生徒が自分のスマートホンを使って一人で操作して担任とやり取りをする活動も行った。

・対象児（群）の事後の変化

総合的な学習の時間や特別活動などの合同授業の時間を使って、顔を合わせて話し合いをすることによって孤独感が緩和するのではないかと考えた。実際「skype」で繋がったことによって笑顔が戻り、話し合いの場面でも積極的に意見を言うこと

ができていた。



また、総合的な学習の時間に中学部のみんなと文化祭の練習を行った。これによって病棟のベッド上でも教室の友だちと話し合いをすることができ、中学部の生徒と同じ時間に文化祭の台本を読む練習や、本番に出られたら一緒に発表ができるようにステージ練習をしているところを観覧したりした。(電波の繋がりが不安定で音声途切れることも多くあったので、発表の流れを病棟で台本を見ながら把握した。)

同じ時間を共有することが可能になり、総合的な学習の時間や特別活動の時間を毎週楽しみにしている様子が生徒の発言から見受けられた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

学校と病棟を繋いだことで笑わなくなっていた生徒が、友だちと笑って話すようになった。消極的になっていたことも、笑顔を見せだしてから積極的に行えるようになった。

(iPad は可動域の関係でアクセシビリティ機能を使っても対象生徒が操作することは不可能であったが、iPhone やパソコン、スマートホンを使用することは可能であった。)

・エビデンス (具体的数値など)

対象生徒はベッドサイド授業になってから病棟から2回しか出ることができない状況であったが、「skype」を使って活動を共にする時間ができてから、表情が明るくなりその他の活動にも意欲的になったように感じた。

・その他エピソード (画像などを含めて)



iPad (用途に合わせて iPhone、パソコン操作も実施) をきっかけに、アプリや機器を操作するだけでなく、初めての取り組みに対して戸惑いが大きかった生徒が、「skype」の通話以外の機能を自ら調べたり、スマートホンの操作方法やアプリを自分で検索したりと、様々なことに対して考える力が付いてきたように感じます。

また、新しいことにもチャレンジする気持ちが出てきており、教員に対して活動の手段のアイデアも自分で考えて言えるようになってきています。「繋がりが悪いと音声聞き取りにくくなるので、途切れるのが困る。」と生徒からの意見も聞けるようになりました。

今年度後半になり仰臥位での生活が増えて「何もできない。」「学校が終わったら何もすることがない。」と話していた生徒が、「PSPならUSBを接続できるかもしれないから調べたい。」と考えて取り組もうとする姿も見られるようになりました。



iPad の操作は、教員が操作をして各教科で資料を見せる時 (数学の式など) や YouTube で観たりしました。また、TVチューナーと「ちよいテレビ」を使って胃ろうの時間にTVを観たり、生徒の興味関心のあるアイドルの画像や曲なども取り込んで鑑賞したりしました。

昨年度の申し込みから対象生徒の病気の進行があり、可動域の変化と身体制限が増えていたので、タッチ操作が困難ではないかと考え研修会のときに質問をしました。はじめの研修で質問した際に「iPad が全てだとは思っていません。用途に合わせて使い

分けてください。」という中邑教授の言葉を信じて1年間取り組んできました。対象生徒は「できない」が増える生活の中で楽しみながら「できる」と感じられることを一番に考えて取り組みました。

iPadだけでなく、iPhoneやパソコン、対象生徒が所有するようになったスマートホンなど機器を使用することで、主体的に生徒ができることが増えました。また、自分で調べた機能やアプリなど知っていることを自慢げに周りの人たちに話すようになりました。仰臥位が増え、ネット環境が整っておらず唯一のスマートホンが操作できない時間も増えてきています。教員側も知らない機能を知っていたり彼の検索力や探求心に驚くこともありました。

デュシャンヌ型筋ジストロフィーで現在は病気の進行が早く、まだ幼く一人で様々なことを抱えています。孤独感と劣等感などを持っている中、機器を主体的に操作することで楽しみながら取り組むことができました。「外部と繋がることができる」便利さを知ったことをきっかけに、自分で機器やアプリの機能などを開拓したり、生徒がskypeを自分で操作して1対1で行事練習もできました。家族の協力もあって（うまく接続できないこともあります）面会が限られてしまう中でも、skypeなどを用いて父母や兄とたわいもない話をして「安心した、よかった。」など教員に話すようになりました。身体機能の制限があっても、形を変えたら主体的にできることが沢山あること、生徒のニーズに応えることの大切さ、教員側が様々な選択肢を持って生徒に提供し、考える力を身につけることで自分から発信できるようになることを対象生徒や中邑教授から学ばせていただきました。ありがとうございました。